

英国リーズ大学における中世ヨーロッパ文学研究の状況 —大学院修士課程におけるコースワークを中心に—

和田 忍

序 英国リーズ大学の英文科と中世学研究所について (2007-2008 年の留学当時)

私は 2007 年 9 月より 2008 年 8 月までイギリス北西部に位置するリーズ大学大学院の英文科で修士課程の学生として過ごした。まず、当時のリーズ大学院英文科に設置されていた専攻を以下に示す。

MA American Literature and Culture
MA American Literature and Culture (Euro)
MA English Language & World Englishes
MA English Literature
MA English Renaissance Literature
MA Icelandic Studies
MA Medieval English Literature
MA Postcolonial Literary and Cultural Studies
MA Romantic Formations
MA Theatre Making
MA Theatre and Development Studies
MA Victorian Literature

現在はこのうちのいくつかが名称を変えたり、消滅したりしている。以前、私の属していた専攻は「中世英文学」である。普通、英文科といえば、「英語・英語圏文学」のみで専門学科・コースが構成され、英語圏以外の語学・文学を扱う場合は他学科と学際的に交流し、学び、研究する、というイメージが湧くはずである。しかし、一部のイギリスの大学の英文科はその学科のなかに「(中世) アイスランド語・文学」を専門とするコースを含んでいる。リーズ大学はまさに後者の部

類であって、英文科の中に「アイスランド語・文学」を専門とするコースを含んでいる。(大学ホームページによると現在は英文科における専攻としては消滅している。)なぜ、このように「英語・英文学」のなかに「アイスランド語・文学」が入り込んでいるのかというと、今日までに形成されてきたイギリスの社会、文化、アイデンティティーに関わりがある。イギリス人の源流の一部を成すゲルマン文化の要素を多く残しているアイスランド文学に18世紀になってイギリス人作家たちは注目した。その後イギリスがアイスランド文学を自国の文学を形成する一部として取り込んだとされる。イギリスは古英語の時代からラテン語の翻訳を通じて独自の文学を発展させ、その後学問の先端を行く立場としてヨーロッパ大陸に教えを与えた。このようにイギリスは周辺諸国・地域との交流が大変盛んだった。イギリスの中世時代の英語やヨーロッパ大陸のラテン語で書かれた書物がまず中世のアイスランドに言語・文学面で影響を与えた。その後ゲルマン文化を示す貴重な標本として中世アイスランドの言語と文学がイギリスに新たな影響を与えてきた。先程述べたように中世時代のヨーロッパ各国の言語・文学・文化は当時のイギリスの様子を伺うために非常に重要な要素である。イギリスのアイデンティティーを決定するひとつの要因がゲルマン民族の大移動によってもたらされたアングル族、サクソン族、ジュート族といったゲルマン民族である以上、その民族が持っていた文化、信仰の影響を考える上で中世アイスランド語文学は一定の視点を与えている。私自身の研究の対象はその点にあったので、イギリスの中世事情とともにアイスランドの中世事情にも興味を持った。そして英文科内の各専攻にある講座を単位取得のためとして受講できる点も含めて、リーズ大学英文科に所属するメリットは自身にとって大きかった。

リーズ大学には「中世学研究所」という中世に関する学際的な研究を行う研究所があり、ここでは主にヨーロッパから中東にかけての諸問題を扱っている。英文科の「中世英文学」専攻の学生は当時必ず「中世学研究所」の Research Methods and Bibliography (研究方法に関する講義。半期)の講座を受講しなくてはならなかった。このほかにも単位互換の形式で「中世英文学」専攻の学生はこの研究所の講座を受講できたので、私もこの研究所主催の講座を受講した。リーズ大学の中世学研究所は IMC(International Medieval Conference) という国際学会を毎年7月に1週間ほどの期間をかけて開催し、その期間中には世界

中の中世学研究者がリーズ大学に訪れる。この国際学会でリーズ大学の名が知られているともいえる。

以降、リーズ大学で自身の受講した講座について、どのような内容であったかを当時のシラバスから授業予定表を参考にしながら示していく。

1. 英文科において参加した講義科目

リーズ大学英文科修士課程の学生には前期にあたる秋学期（11週）に Research Methods and Bibliography の講義とそのほかに 1 種類の講義に参加し、秋学期（11週）にさらに 2 種類の講義に参加して最後に修士論文を作成することを課せられている。また、「中世英文学」専攻の学生に関しては Inventing the Middle Ages 講座（秋学期）を必修として受講することが求められた。よって、英文科において私が受講した講座は秋学期に 2 つ、春学期にひとつの計 3 つの講座であった。その各講座の名称を以下に示す。

(1) Inventing the Middle Ages

(2) Texts and the Word: Christian Traditions in Old English Literature

(3) Old and New Beliefs in Medieval Icelandic Literature: From Pagan to Christian

前者 2 つが秋学期に受講した講座で、最後の講座が春学期に受講した講座である。順にそれぞれの講義の内容を示していくこととする。

(1) Inventing the Middle Ages

この講座はいわゆる team teaching で、中世英文学の先生 3 名が全 11 回の講義を 3 回ずつ受け持って行われた。全受講学生は 10 名で、この講座の目的は 'to introduce students to the history of the medieval literary studies and to encourage them to consider their own role in its future development' とあるようにこれまでの中世文学研究の歴史をたどり、今後の自身の研究の指針を

つけるためのものである。ここでは3つの要素 (foundations, Methodologies, History and Theory) に関しての講義が行われた。以下にその講義内容を示す。

[Foundations]

1. The fair field of medieval literary studies. How did we get here?
Distinguishing OE, EME, ME languages and literatures. Old Norse language and literature. English as a discipline. EETS.
2. Classical to medieval: The Orpheus myth.
Orpheus in Ovid, Boethius, and one or two later medieval authors.
3. The Bible in English.
Examination and composition of bible translation in Old English and Middle English (e.g. Wycliffe Bible).

[Methodologies]

4. The vernacular.
Interaction between Latin and vernacular: OE and ON.
5. Manuscript culture.
Close examination of selected facsimile manuscripts. Discussion of editorial procedures.
6. Manuscript to print.
Rise of print, impact on manuscript culture; emergence of canon of popular texts.
7. Sources and Analogues.
Case studies. Vernacularity and Latinity. [Choice of texts to be negotiated with student].

[History and Theory]

8. Medievalism and the discipline.
History of the discipline of English studies: the eighteenth and nineteenth centuries.

9. Literary criticism: Courtly Love.

Origins of the term 'courtly love' H, and its implications for reading medieval romance texts.

10. Critical theory and medieval studies: recent trends.

11. Medieval futures.

Reflection on work currently going on in the field: recent PhDs in the School of English

この講座を含めて、すべての講座で受講中にエッセイが課された。あわせて6,000語のエッセイで、通例2度に分けて提出することになっている。この講座では最初に2,000語、そして最後に4,000語のエッセイが課せられた。

(2) Texts and the Word: Christian Traditions in Old English Literature

この講座は古英語の言語・文学演習であった。受講学生は私を含めて3人しかいなかったが、残りの2人は古英語を専門としていなかったため、最初は古英語の文法の手ほどきの時間を別に設けて、授業が進行していた。基本的に毎週異なる古英語のテキストを扱って、その一部の原文を訳読し(約1時間)、その後そのテキスト全体に関する内容をキリスト教の影響という観点から討論する(約1時間)という形式で行われた。以下に授業で扱った内容を示す。

1. Introduction
2. Preliminary OE reading
3. Genesis A
4. Alfred's law-code
5. *Beowulf*
6. Exodus
7. Deor
8. Hagiography (I): Guthlac A
9. Hagiography (II): Guthlac B

10. Judith

11. Ælfric Homilies

学期中に他の講座と同様、2 回計 6,000 語のエッセイ提出を求められた。そのほかに講座の最終回後に古英語の現代英語解釈の試験が行われた。この試験ではこれまで授業で扱ってきた基本的な古英語読解の知識を生かして、授業では読まなかった古英語のテキストをを意味の通る英文に解釈するというものであった。

(3) Old and New Beliefs in Medieval Icelandic Literature: From Pagan to Christian

この講座は古アイスランド文学に関する講座であった。ゲルマンの異教からキリスト教への移行過程について文学を通した解題だけでなく、実際には古アイスランド語の詳細な解釈もあわせて行われた。授業人数に関して、受講登録しているのは私一人だったが、中世学研究所所属の博士課程の学生が 1 名、登録はしていないもののアイスランド文学に興味がある英文科修士の学生 1 名を加えた学生 3 名と担当教員とで構成されていた。古アイスランド語読解に関しては毎回授業の前半 1 時間ほどを使って、最初の 6 回ほどで *Skírnismál* を、後 5 回ほどで *Egils saga* を読み進めた。授業後半部のアイスランド文学の討論に関する内容は以下の通りであった。

1. Introduction

2. *Bárðar saga Snæfellsáss*.

3. Snorri Sturluson (I): from myth to mythography in Snorra Edda

4. Snorri Sturluson (II): *Hákonar saga goða*

5. Constituting society: Eddaic verse.

6. Reconstructing society: *Eyrbyggja saga*.

7. A really cool saga: *Egils saga*

8. The walking dead (*Bárðar saga*, *Ynglinga saga*, *Eyrbyggja saga*)

9. Women: *Helgakviða Hundingsbana II*

10. Homilies.

11. Saints and Kings: *Norna-Gests þáttir*, *Hallfredar saga vandræðaskálds*

この講座も 2 回であわせて 6,000 語のエッセイ提出を求められた。そして、講座の最終回直後に古アイスランド語の現代英語解釈の試験が行われた。試験の形式は古英語のものと同様で基本的な古アイスランド語語彙・文法の知識を生かしてこれまでに読んだことのない古アイスランド語テキストの解釈をするものであった。

2. 中世学研究所において参加した講義科目

中世学研究所に関する受講講座は以下の 2 つである。

(4) Research Method and bibliography

(5) Vikings, Saxons and Heroic Culture

前者が秋学期に、後者が春学期に行われた。以降、これらの講座の内容を説明する。

(4) Research Methods and Bibliography

この講座は中世学に特化した研究方法・様式の講義で、エッセイ、論文の書き方に始まり、中世における科学・写本学に関する内容の解説まで扱っている。この講座も team teaching で行われ、受講学生は中世英文学の学生 4 名を含めて 15 名ほどだった。以下、その内容を示す。

[Working methods and resources]

1. Introduction to the module: planning and organising work

Electronic resources

2. Electronic bibliographies

Electronic *International Medieval Bibliography*

[Referencing and proofreading]

3. Proofreading and correction (I)

Composing bibliographies; preparation for assignment 1

4. Writing bibliographic citations

Referencing style

5. Proofreading and correction (II)

Preparation for assignment 2

[Auxiliary sciences]

6. Medieval money and chronology

[Manuscripts and texts]

7. Introduction to medieval manuscripts

8. Editorial principles

9. Manuscript description

Historical documents

[Preparation for future work]

10. Web resources for future work

Proofreading mock exam

11. Preparation of research projects and dissertations;

Revision and module evaluation

この授業の特徴は何より proofreading（校正法）にあり、大学の英文提出物の書式について詳細に学習し、どのように校正をするのかというその約束事を問う試験まであった。実際、この書式に慣れ、さらに校正方法まですべて頭に叩き込むことに相当苦勞を伴った。しかし、英文科と中世学研究所のすべての先生がこの方法ですべてのエッセイや論文の訂正を行うので、覚え込めば何が間違っているのかについて一目瞭然であった。また、自身で書く際に間違えないよう以前より気をつけるようになった。かなり細かいことまで教えられたが、このような書

式、体裁を覚えこむ機会は今後英文を書く上においても大変ためになったと感じている。

(5) Vikings, Saxons and Heroic Culture

この講座は古英語・古アイスランド語・古高ドイツ語の文学を3回ずつ概観するという講義であった。また、この講義は毎回約1時間で、そのほかに上記3言語のうちひとつを集中的に学習するという時間もあった。(毎週1時間ほど)私は古高ドイツ語の言語を選択し、そこで読んだテキストはThe Nibelungenlied (『ニーベルンゲンの歌』)の一部であった。以下にこの講義に関する授業内容を示す。

1. Introduction

History and legend: transmission of characters and episodes.

[Old English heroic poetry]

2. Heroic values: history and legend in *Beowulf*.

3. Narrative reworkings: *Beowulf* and *The Finnsburg Fragment*.

4. Character and its contextualisation: *Beowulf* and *Hildegyth*.

[Middle Icelandic poetry and prose]

5. The horizon of history: Snorri Sturluson's *Ynglinga saga*

6. From heroic poetry to heroic prose: *Völsunga saga* and related Eddaic poems

7. Heroic culture on Iceland: *Gísla saga Súrssonar*

[Middle High German poetry]

8. *The Nibelungenlied*: sources and themes.

9. *The Nibelungenlied*: characters and themes.

10. A heroic or chivalric *Nibelungenlied*?

11. Overview

この講座もこれまでと同様に 2 回計 6,000 語のエッセイ提出を求められた。そして、講座の終了後に古高ドイツ語 *The Nibelungenlied* の現代英語での解釈を問う試験が行われた。この試験はこれまでに読んだ部分の解釈をするという形式であった。授業で扱った部分の理解度を測る方式なので、これは日本の一般的な試験形式と似ていると感じた。

3. 修士論文について

リーズ大学英文科の修士論文に関して、語数は 12,000 語から 15,000 語の範囲とされていたが、中世英文学専攻の場合のみ中世学研究所の *Research Method and bibliography* を受講しているということで 9,000 語から 10,000 語という範囲であった。(中世学研究所の *Research Method and bibliography* は試験があったが、英文学科の同講座には試験がなかった。)そして、指導教官の決定は学生が入学して半年後に提出する仮タイトルと簡単な論文内容の要約を判断して決められた。したがって、入学してすぐ指導教官が決まるわけではなかった。指導教官が決まると、指導教官に個人的に連絡をして論文作成を行うという過程は日本の場合と同様ある。しかし、大学暦で夏季休暇の始まる日からは指導教官からの指導を受けられない、という規則があった。これは大学教員自身の研究を行う時間を確保するという目的であるらしい。修士論文を 1 年の学業期間の中で仕上げるというのはなかなか大変な作業である。だが、受講している授業やその担当の先生、また指導教官はさまざまなアドバイスを与えてくれるので、1 年間研究に没頭できればなんとか論文をまとめられるものであると感じた。実際、自身の現在にもつながる研究テーマは留学中に受講した講座の内容、その先生のアドバイス、そして指導教官からのアドバイスで整えられてきた。

4. 終わりに

中世文学の世界は「英語」を中心に行っていても必ず他国の言語、文学、文化、社会等のさまざまな面でイギリス以外の要素と密接な関係があり、それらを知らずにその時代を語れないという側面を持つ。そのような事情からか、中世学研究所の修士・博士の新入学生は必ずラテン語の講義、および試験を受けなければならなかった。リーズ大学で出会った中世関係の研究者はみなラテン語だけでなく古アイスランド語や中世フランス語、古高ドイツ語等、英語以外の語学・文学のことをよく理解していた。このように中世学は学際的であることが求められ、リーズ大学ではその学際性がとても有機的であった。

もちろん、研究以外にも日本と異なる大学教育の形式やしぐみを知ることは今後日本の大学教育に関わる上で参考になる部分が多くあった。シラバスに関してはこちらでは多くを割愛してしまったが、毎回の授業のために細かく到達目標設定や参考文献などを示したプリントが配布され、とても1回分の授業で準備しきれないと感じたものだった。英語の表現や英語での文章構成の仕方についても大学の先生に多くの指摘を受けることができたので、こうした経験を研究・教育等のさまざまな場面で生かしたいと思う。